

## 第9章 そして世界の構造

私を中心で、私が認識する世界がある。

そしてこの認識では、私が変われば世界も変わることを意味する。この世界は、私にとって入れ替え可能な世界である。

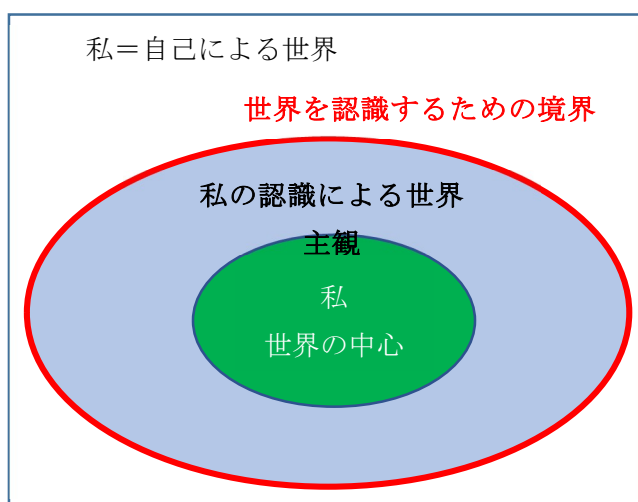
しかし世界は認識されるので、構造があり、中身はなんにでもなれる世界になる。

世界は領域だけあり、入れるものは私の認識によることになる。また私を認識する対象がないため、何にもないことになる。そして世界を認識するための境界は、なんにでも変更できることになる。

世界は空であり、無限の殻が覆っている構造ができあがる。

### 第9章1項 私の認識による世界

この世界は、主観によって世界が変わることができる。そして神の領域は、外側に張り付き、神の領域として認識できない。



神の領域は、世界として認識するための境界になる。

私を認識するための起点（私たち、帰属、神）がなくなり、自己と私と同じ大きさだと、私を認識させている己が消失する。そして私を、認識できなくなり空洞化する。

空洞化した私では、自己の感覚認識と自己との直接的な関係が優先されるようになる。そして世界も、私（自己）からみた認識が、世界になる。

主観による世界が誕生する。

この中で、私は、神からの認識を失い。さらに帰属からの認識がなくなる為、さらに縮小を余儀なくされ、最終的に私の領域がなくなることになる。

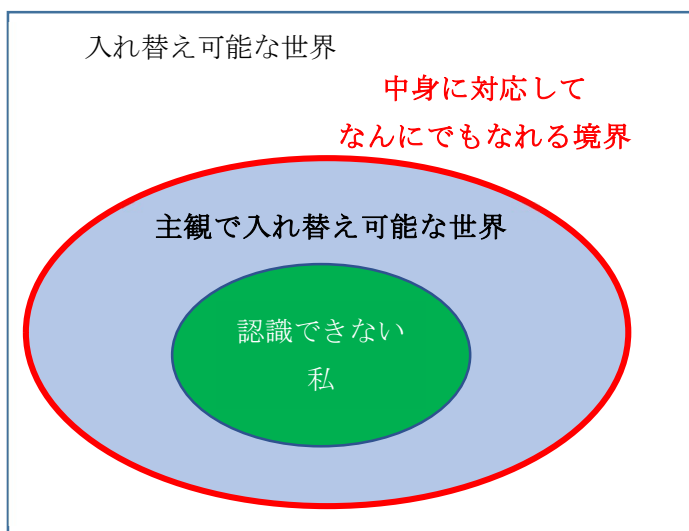
いるかどうかさえ分からない私が誕生する。

## 第9章2項 認識の構造

外部からの情報と私の活動で、世界が変わってしまう。

この実感は、主観的なもので、実際は、主観のほうが変わっただけである。それであれば違った行動をして、私（主観）が変われば世界は変わる。

主観により、世界が変えられることを、私が認識すると、世界は入れ替え可能になる。

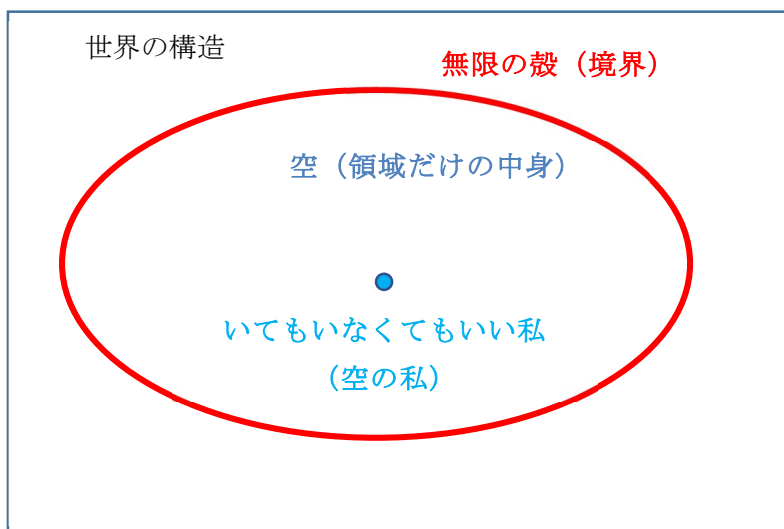


このことは、中身は何でもよく、構造があり、そこに当てはめるのと同じである。

したがって世界の構造は、世界に入れる為の領域と、世界として認識させるための境界が、必要になる。

領域のほうは、なんでも入れられるため空になる。

そして境界は、なんにでもなる領域に対応するため、なんにでも変化可能な、無限になる。



領域だけの世界。中身は空と、それを認識するための境界である無限からなる構造になる。

また私は、いてもいなくてもよい存在なので、入れるものに同化される。したがって

入れ替わるものに対応した私に、入れ替わることになる。

#### 第9章2項補足 無限と空について

ここでいう無限とは、無限大とか無限小とかとは違い、なんでも当てはまるというものである。1でもいいし2でもいい、1でも2でもある、とゆう意味での無限とする。

ここでいう空は、何もないけど領域はある、とゆう意味。

ここにおいて世界が、構造として完成する。

中は空であり、無限の殻からなる構造として、完成する。

なんでも入る。オレンジの世界、果物の世界、人の世界、金融の世界、生物の世界。

そして、オーバーラップも重なりも、無限の殻が、見る側に合わせ対応する。